

[実践報告]

## 足寄少年自然の家における不登校生徒を対象とした 野外教育のとりくみ

小玉 功<sup>1</sup>・舛田 仲永<sup>1</sup>・加藤 敏之<sup>2</sup>・諫山 邦子<sup>2</sup>・奥山 冽<sup>2</sup>

<sup>1</sup>北海道立足寄少年自然の家 <sup>2</sup>北海道教育大学釧路校

### An outdoor education program for school refusers at Ashoro Children's Center

Takashi KODAMA<sup>1</sup>, Tomonaga MASUDA<sup>1</sup>, Toshiyuki KATO<sup>2</sup>, Kuniko ISAYAMA<sup>2</sup> and Kiyoshi OKUYAMA<sup>2</sup>

<sup>1</sup>Hokkaido Ashoro Children's Center, Ashoro 089-3734, Japan

<sup>2</sup>Hokkaido University of Education, Kushiro 085-8580, Japan

#### 1. はじめに

北海道立足寄少年自然の家(以下、足寄少年自然の家)は、「自然とのふれあいや集団生活を通して、自ら考え行動できる能力を培い、心豊かにたくましく生きる子どもを育てる」ことを目的に、道内6番目の道立少年自然の家として1997年に設置され、以来、その立地条件を生かし、自然体験を中心とした野外教育プログラムの開発、提供に努めてきた。ここで報告するのは、2000年度に行われた足寄少年自然の家の主催事業の1つ、「のんびりのびのび自然体験①-Chance, Challenge, Change・3つのCを求めて-」の顛末である。この事業は不登校の児童・生徒を対象として、3泊4日の日程で8月から9月にかけて行われ、深夜の雌阿寒岳登山を中心とする冒険プログラムを内容としたものであった。

今回、いくつかの心理学的尺度を用いてこのプログラムの効果を測定するが、我々の願いは雄大な自然を舞台にして精神的・身体的な自己の限界に挑戦する中で、予想外のことがらに対処できる柔軟で積極的な行動力と思い通りにならない事態を受け入れる謙虚な自己省察の力、共同の作業を通じてしたたかに課題を達成した時の達成感や仲間との連帯感、これらを育み、体感してもらうことにある(資料参照)。得られた資料を活用して、今後のプログラム開発に資することを期したい。

#### 2. 方法

##### 2.1. 調査対象者

調査対象者を表1に示す。いずれも不登校の児童・生徒で、小学生2名(うち女子1名)、中学生8名(うち女子3名)、計10名(うち女子4名)である。

##### 2.2. プログラムの概要

概要 2000年8月31日より9月3日までの4日間、足寄少年自然の家、およびオンネット野営場を主な会場として実施した。不登校の児童・生徒10名の他に、リーダーとしてボランティア大学生6名が参加した。また帯広市内中学校教員2名、足寄少年自然の家の職員9名も支援にあたった。児童・生徒は出身地域を異にする3ないし4名ずつの3班に分けられ、活動は基本的に班を単位として行われた。それぞれの班にはボランティアの大学生2名ずつがリーダーとして加わり、4日間の行動を共にした。

プログラム全体の中心は第3日目に置いた夜間の雌阿寒岳登山にある。これに向けて第1日目のナイトウォーク、第2日目のトレッキングが配置され、徐々に負荷を高めることを意図している。第4日目は反省・総括を兼ねた負荷の低い手技に当てられる。日程を表2-1より表2-4に示す。

個別プログラムの目的 個別プログラムのいくつかについて、その目的を説明する。

野外炊飯(第1日目・第2日目):参加者が協力してカレーライス・焼き肉を作り、共同で食事をするにより、仲間を食べることの楽しさを味わわせる。自分のこと、自分達のは、自分、自分達でしていくという基本を体験する。班内の協力体制を育む。薪・炭それぞれを使った野外炊飯の知識を学ぶ。

ナイトウォーク(第1日目):夜の暗さや静寂の中の音を感じさせる。夜の森の中を歩く活動を通して、深夜登山の感覚慣らし、体慣らしをする。班での行動を通して、お互いの顔が見えないと言う条件の中で、一般に不登校児が不得手とされる自己表現や相互の疎通を容易にさせ、お互いの交流を深め、仲間意識を育む。

トレッキング(第2日目):漸進的に身体的負荷を高め、後に

表1 調査対象者

	小学4年		小学5年		小学6年		中学1年		中学2年		中学3年		合計		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
帯広市							3			2			3	2	5
足寄町									1		1		2		2
芽室町		1	1					1					1	2	3
合計		1	1				3	1	1	2	1		6	4	10

表 2-1 日程 (第1日目: '00年8月31日)

時間	日程	内容
13:00	レクリエーション	全体では鬼ごっこなど、班別ではフープリレーなど。
14:30	受付	参加者自身による提出物の提出・配布物の受領など。
14:40	開会式	所長挨拶・所員自己紹介・リーダー自己紹介など。
14:50	オリエンテーション	研修目的の説明・日程確認・生活上の注意・自己概念アンケート(事前)記入など。
15:30	野外炊飯	薪による炊飯(カレーライス)と食事。用具の準備・薪割り・食材準備・火付け・食事・後片づけなどの作業を含む。
19:30	ナイトウォーク	施設周辺の「常盤の沢」でトレッキングをする。班単位で行い、終了後に感想を話し合う。
21:00	入浴・シーツ配布	
21:30	就寝準備	しおりに日記・自己評価を記入、リーダーに提出。
22:00	就寝	リーダーは打ち合わせ、日記にコメントを記入、その後一斉巡回。

行う登山の準備をする。湿地帯や森林の中を歩きながら、昼間の森を感じとり、草花や樹木の観察をする。集団で歩くことの間を味わう。

雌阿寒岳登山(第3日目):夜中から早朝にかけての登山を通して、自然の持つ雄大さや厳しさの中に自己の身をさらすことにより、自分の思い通りにならないこと、自分の身体にかかわる事実を謙虚に受けとめ、いかに目的達成のために問題を解決していくかを体感する。登山を通して、達成感や成就感を味わわせる。集団での登山を通して目標達成のために、自分のできることを考え、実行する力を育てる。

野営用具積み込み・かたづけ(第2日目・第3日目):自分のこと、自分達のは自分で責任を持って役割を果たしていくことの大切さを知る。協力して野営用具を積み込み・かたづけることにより、全体で事業を成功させようという意欲、意識付けを行い、仲間意識を高めていく。

テント設営・撤収(第2日目・第3日目):班員同士が協力し合ってテントを設営・撤収する作業を通して、協調性・問題解

決能力を養う。大人の力を借りずに自分達の手で寝床を確保する活動を通して、自己有用感を持たせる。

しおりの記入(第1日・第2日目・第3日目):一日を振り返り、自分の気持ちを素直にしおりに表現する。自己評価・リーダーからのコメントを通じて明日への意識付けを行う。

班会議(第1日、第2日目、第3日目):個人の意識から小集団としての意識を広げていくための動機付けを行う。メインプログラムに向けて、自分達で達成するという意識付けを行う。自分の思っていることを人に伝える。人の意見を聴く。自分と他者との類似点や相違点に気づき自分や他者を認める心を育てる。

### 2.3. 調査票と調査手続き

自己概念 独自に作成した自己概念調査票を用いた。調査票は17の短文からなり、それぞれに対して、「あてはまらない」、「あまりあてはまらない」、「ややあてはまらない」、「ややあてはまる」、「かなりあてはまる」、および「あてはまる」のいずれ

表 2-2 日程 (第 2 日目: '00 年 9 月 1 日)

時間	日程	内容
6:30	起床・洗面・清掃	
7:30	朝の集い	代表挨拶。
7:45	朝食・部屋整理	食堂で食事後、部屋の整理。
9:00	班会議	しおりを元に前日の活動についての話し合い。キャンプ・登山に向けて個人・班・全体の目標設定。
9:20	野営用具積み込み	
10:20	バス乗車・移動	足寄少年自然の家より、雌阿寒岳山麓オンネトー野営場まで移動。
11:20	野営場到着 ・テント設営	指導員が説明しながらモデルとしてテント設営をする。その後に参加者自身でテント設営をする。
12:50	昼食	弁当。
13:30	トレッキング	湖周辺の湿地帯、森林をトレッキング。野営場を出発し、オンネトー北岸、展望台を経て野営場に戻る。
15:30	野外炊飯	炭による炊飯(焼き肉)と食事。用具の準備・食材準備・火付け・食事・後片づけなどの作業を含む。
19:30	班会議 ・雌阿寒岳登山準備	野外炊飯の感想や登山に向けての期待の話し合い。携帯食の配布。
20:30	自由(仮眠) ・就寝	しおりに日記・自己評価を記入、リーダーに提出。 リーダーは打ち合わせ、日記にコメントを記入、その後一斉巡回。

かを選ぶことを求めた。調査は第 1 日目の開会式直後と第 4 日目の閉会式の直前の 2 回行った。

活動の自己評定 毎日の活動の自己評定を行った。しおりの日記の一部に「やったぜ度(以下、達成感)」、「楽しさ度(以下、楽しさ)」、「疲れた度(以下、疲労感)」、「仲良し度(以下、連帯感)」、および「協力度(以下、協調性)」の 5 項目について 10 点満点で記入を求めた。このうち最後の協調性についての評定は、今回初めて行うもので、対人関係にかかわる仲間意識を見る連帯感と区別して、集団生活を行う上でのルールに従った協調の程度を知ろうとして設けたものである。評定作業は、閉会式の直前に行われた最終日を除いては、毎晩、就寝前の 2、30 分の間に日記の記入と共に行われた。この時間は班毎に班のリーダーと班員が自由な話し合いをする時間でもある。評定作業はこのような話し合いのきっかけとなり、また児童・生徒自身にとっても意味のある総括活動となることが期待された。

### 3. 結果

#### 3.1. 実際の経過

4 日間を通じて天候は不順であった。このため、プログラム

の実行過程は相当の影響を受けた。第 1 日目は小雨がときおり降ったが、野外炊飯は予定通り行われた。第 2 日目は小雨の中、雨具をまとってトレッキングをし、野外炊飯はテントの中で行われた。この夜から豪雨となり、第 3 日目未明の登山はその中で行われた。コースの危険性、参加者の疲労の程度を考慮して、登山は 3 合目付近まで達したところで中止した。この日の朝食は予定のパン・ラーメンに替えて、支援スタッフの用意した暖かいブタ汁を供した。テント撤収は雨間をぬって行われ、キャンプファイヤーも屋内の活動に変更された。この日、参加者が受けた精神的、身体的負荷は相当に高かったと思われる。第 4 日目は予定通り行われた。

#### 3.2. 自己概念の変化

「あてはまらない」に 1 点を与え、以下「あてはまる」に 6 点を与えるまで 1 点刻みに得点化した。事前と事後の平均値を比較した結果を表 3 に示す。

「5 自分のことについて、深く考えることがある」、および「16 自分自身から、目をそらしたり、逃げてはいけないと思う」で正の変化が有意、ないし有意傾向であった。自己への省察にか(かわる自己概念に肯定的な変化が認められた。「8 自分は、自然と一緒に生きていると思う」で正の変化が有意であった。

表 2-3 日程 (第3日目: '00年9月2日)

時間	日程	内容
1:00	起床	
1:20	バス移動	野営場より野中温泉登山口まで移動。
1:30	雌阿寒登山	野中温泉登山口より山頂を目指す。山頂で日の出を迎え30分休憩後、下山する。登りは20分に7分の休憩、降りには30分に7分の休憩を置く。
9:30	下山完了 ・朝食	パン・カップラーメン。
10:00	自由	仮眠・休息も含め自由行動。
12:00	昼食	弁当。
13:00	テント撤収	指導員が説明しながらモデルとしてテントを撤収する。その後に参加者自身でテントを撤収する。
15:30	バス乗車・移動	オンネット野営場より、足寄少年自然の家まで移動。
16:30	野営用具かたづけ	
17:15	夕べの集い	代表挨拶。
17:30	入浴	
18:15	夕食	食堂で食事。
19:00	キャンプファイヤー	営火場でキャンプファイヤー。各班の感想を織り込み、これまでの活動を振り返る。
20:30	班会議 ・自由交歓	登山の感想の話し合い。しおりに日記・自己評価を記入、リーダーに提出。
21:30	就寝準備 ・リーダー打ち合わせ	リーダーは打ち合わせ、日記にコメントを記入、その後一斉巡回。
22:00	就寝	

表 2-4 日程 (第4日目: '00年9月3日)

時間	日程	内容
7:00	起床・洗面・清掃	
7:30	朝の集い	代表挨拶。
7:40	朝食・部屋整理	食堂で食事。
8:40	清掃点検	
9:00	記念作品づくり	4日間を振り返り、自分の一番心に残った写真を1枚選ぶ。焼き板と拾い集めた自然の素材を使って、工作室でフォト・スタンドを製作する。
12:00	昼食	食堂で食事。
13:00	アンケート	しおりに感想・自己評価を記入。自己概念アンケート(事後)記入。
13:15	閉会式	参加者全員の感想発表・チーフリーダー感想発表・所長挨拶。
13:30	解散・後片づけ	

表3 自己概念の変化

	事前	事後	検定結果
	Mean(S.D)	Mean(S.D)	
1 自分に、自信をもっている。	3.00(1.70)	3.50(1.65)	
2 自分は、いろいろな人達に支えられて生きていると思う。	4.70(1.49)	5.50(0.85)	t(9)= 2.23 <sup>+</sup>
3 友達の考えを、よく聞くほうである。	3.80(1.55)	3.40(1.35)	
4 自然の大切さについて、よく考えている。	3.30(1.49)	3.40(1.71)	
5 自分のことについて、深く考えることがある。	3.40(1.43)	4.80(1.32)	t(9)= 2.49 <sup>*</sup>
6 人よりおとっていると、感じることもある。	3.56(2.07)	3.89(1.62)	
7 困っている友達を、助けるほうである。	3.70(1.57)	3.70(1.77)	
8 自分は、自然と一緒に生きていると思う。	3.40(1.27)	4.30(1.77)	t(9)= 2.59 <sup>*</sup>
9 人の役にたつことをしたいと思っている。	4.10(1.52)	4.60(1.58)	t(9)= 1.86 <sup>+</sup>
10 がんばれば、できないこともできるようになると思う。	3.90(1.45)	4.80(1.62)	
11 何にでも、興味を示すことが多い。	3.70(1.70)	4.40(1.71)	t(9)= 2.69 <sup>*</sup>
12 一人でも、生きていけると思う。	3.20(1.87)	2.30(1.34)	
13 考えるより、まず行動するほうである。	3.40(1.78)	3.60(1.84)	
14 自分は、世の中のために生まれたと思っている。	2.60(1.78)	2.70(1.49)	
15 人より、すぐれていると思う。	2.30(1.64)	2.60(1.51)	
16 自分自身から、目をそらしたり、逃げてはいけなと思う。	3.50(1.96)	4.10(2.08)	t(9)= 2.25 <sup>+</sup>
17 自然を守るために、何かしたいと思う。	3.80(1.87)	4.20(1.14)	

注1: <sup>+</sup>p<.10 <sup>\*</sup>p<.05

注2: 「あてはまらない」に1点, 「あまりあてはまらない」に2点, 「ややあてはまらない」に3点,

「ややあてはまる」に4点, 「かなりあてはまる」に6点, および「あてままる」に6点を加え,

平均と標準偏差を求めた。

自然とのかかわりという点で自己概念に肯定的な変化が認められた。「11 何にでも、興味を示すことが多い」で正の変化が有意であった。積極的な意欲という点で自己概念に肯定的な変化が認められた。「2 自分は、いろいろな人達に支えられて生きていると思う」、および「9 人の役にたつことをしたいと思っている」で正の変化が有意傾向であった。他者とのかかわりという点で自己概念の肯定的な変化が示唆された。

調査対象者の数が10名という少数であったにもかかわらず、17項目中6項目で有意差、ないし有意傾向が見られた。今回のプログラムの積極的な効果は十分確認されたと言えよう。

### 3.3. 活動の自己評定における変化

活動の自己評定の結果を図1に示す。分散分析の結果、達成感の平均値に有意な変化が認められた(F(3,18)=5.24, p<.01)。LSD法を用いた多重比較の結果は、第1日<第3

日、第1日<第4日、第2日<第4日であった(MSe=3.63, p<.05)。達成感は、日を追うにつれ強まったと言える。

楽しさの平均値は有意な変化が見られなかった。楽しさは、4日間を通じて比較的高い水準を保ったことが、図1からうかがえる。

疲労感の平均値に有意な変化が認められた(F(3,21)=3.35, p<.05)。I.SD法を用いた多重比較の結果は、第1日>第4日であった(MSe=4.85, p<.05)。疲労感、日を追うにつれ弱まったと言える。

連帯感の平均値の変化は有意傾向であった(F(1,21)=2.93, p<.10)。同じく多重比較の結果は、第1日<第4日であった(MSe=4.19, p<.05)。連帯感、日を追うにつれ強まったことが示唆される。

協調性の平均値に有意な変化が認められた(F(3,21)=3.38,

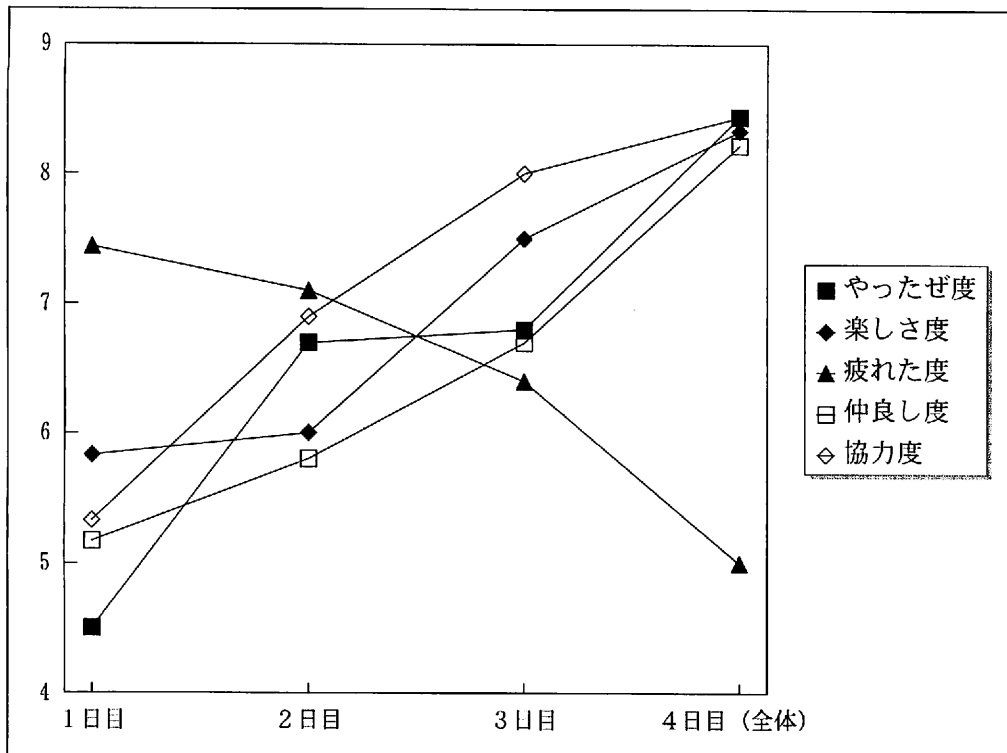


図1 活動の自己評定。

$p < .05$ )。同じく多重比較の結果は、第1日 < 第3日、第1日 < 第4日であった ( $MSe = 3.19, p < .05$ )。協調性は、日を追うにつれ強まったと言える。

以上、要するに肯定的な意味を持つ4項目のうちの3項目で、平均値は日を追うにつれ増加し、唯一否定的な意味を持つ1項目で平均値は減少した。この側面でも今回のプログラムの効果は十分確認されたと言える。

#### 4. 終わりに

1. 今回のプログラム全体の中で主要な位置を占める雌阿寒岳登山は、豪雨のために3合目付近で中止され、山頂で日の出を迎えるという目的を果たすことができなかった。それにもかかわらず自己概念や行動の自己評定では、肯定的な変化が確認された。登山という主要な個別プログラムは形式的には中断されたが、課題を一つ一つ達成する中で漸進的に負荷をかけ、3日目に負荷を最大にするというプログラムの構造に対しては、否定的な影響を与えなかった。むしろこのアクシデントは、雄大な自然の力を実感し、仲間との共同の作業を通じて個人の精神的・身体的限界に挑むという、プログラム本来の目的を達成する積極的な契機になったと言えるのではない。

2. 行動の自己評定では、疲労感のみが日を追うにつれて減少した。これと同様の経過は、不登校生徒を対象として長期

宿泊型冒険教育プログラムを実施する中で、小玉・他(2000)が確認している。その場合にも、身体的な負荷の高い登山やカヌーイングがプログラムの後半に置かれていたにもかかわらず、疲労感のみが漸減していった。このことから2つのことが推定される。1つは、これらの疲労感が、身体的というよりは精神的な要素の強いものではないかということである。そうでなければ身体的負荷の高いプログラムの後半に疲労感が漸減することの説明は難しい。もう1つは、このような現象は不登校の児童・生徒に特有のものではないかということである。不登校の児童・生徒には他者との疎通が困難である者が一般に多い。そして野外教育プログラムがこの点の改善に効果のあることを奥山・他(1999)が見ている。彼らが初めて顔を合わせ共同の作業に取り組む第1日目は、実のところ他者とのかかわりから生じる精神的負荷が最大であったのではないだろうか。プログラムが成功裏に進めばこのような負荷は漸減するであろう。疲労感の漸減はこのことの反映であった可能性がある。

行動の自己評定は今回も含めて2回しか行っていない。また、そのいずれも不登校の児童・生徒を対象としたもので、一般の児童・生徒についての資料はない。それゆえ、上の推測の可否を末だ言うことはできないが、今後検討する価値のある仮説であると思われる。

3. プログラムが効果を上げるまでには様々な要因がかかわるが、ここではその1つとして、ボランティアで参加した大学生の役割に注目しておきたい。例えば、中学生(女子)Nは、第1

日日夜、しおりに、「つかれた。こわかった。もうやりたくない。(二どと)ママ、ナイトウォーク」と記す。これに対して、リーダーである大学2年生(女子)Hは、「Nは野外炊事とってもいい動きをしていたね。いつもお母さんの手伝いをしているのがすぐわかりました。ほかの2人もがんばっていて、全員が協力したからあんなに美味しいカレーができたんだ！だから協力度満点なんだね。すごいぞ。この調子でこれからもみんなで力を合わせていこうぜ！」とコメントを書き、もう1人のリーダーである大学4年生(女子)Mは、「ナイトウォーク、実はMもおぼけが出てこないか、すっごく不安で恐かったんだよ。だけどNは頑張ってる歩いてね。布団だって結局一人でしかたでしょ。Nは自分が思っているよりも大きな力を持っているんだとMは思うよ。おおきなチャレンジをするのは不安で恐くて、おくびょうになってしまうけど、『何でもやってみよう！！』の気持ちを忘れず、残りの3日間を一緒に楽しくすごそうね！！」と記す。日記のレベルに限っても、このようなやりとりが3夜にわたって続けられている。これらの背景に現実に展開されている濃密な人間関係を想像すべきであろう。不登校の児童・生徒を対象としたキャンプにおけるボランティア・リーダーの役割を検証することは、今後の重要な、そして魅力ある課題の1つである。

## 文 献

- 小玉功・森敏隆・菅原利昭・齊藤詔司・奥山洵・諫山邦子・加藤俊之(2000):キャンプ経験が不登校生徒に与える行動的、心理的効果。環境教育研究, 3-1, 59-68.
- 奥山洵・諫山邦子・加藤俊之・齊藤詔司・菊地和孝・森敏隆(1999):キャンプ経験が不登校生徒に与える心理的影響。野外教育研究, 3-1, 25-36.

## 資 料

(参加者に配布した「しおり」より抜粋)

### 「のんびりのびのび自然体験①」 事業にあたってネイパルあしよの願い

★「のんびりのびのび」は、「楽しい」ものです。

では、「楽しい」っていったいどういうことなんだろう？

自分で好きなことをする。友だちと遊ぶ、おしゃべりをする。もちろんこれらも楽しいことのひとつです。

ネイパルあしよが願う本当の楽しさには、これらのほかに、何かの目標(自然と向き合う・仲間といっしょに何かをする)に向かって全力で取り組んで、そしてそれをやり終えたときに、「不安だったけどできたんだ」とか、「自分ってすごいんだな」とか「仲間がいたからできたんだな」、そういった瞬間に味わううれしい感じ、そういったものが本当の「楽しさ」だと考えています。

みんなで3泊4日を楽しんだ後に「楽しかったね」ってやる事業にしましょう。

★「のんびりのびのび」は「きたえる」場です。

この事業は、学校に行くことができずに悩んでいる小・中学生とその保護者を対象にしたいいわゆる「生きる力」を育てるための事業です。そのためのプログラムを専門的に作ってあります。プログラムの中にはみなさんにとって多少つらいことやいやなことがあると思います。しかし、それらは全て「薬」だと思って素直に受けとめてください。そして、自分の体の中や心の中にある本当の力を信じて、自分をしっかりと見つめ、進んで物事に参加する勇気を持って取り組んでください。

★ 予定通りに行かないことが予定通りだと思ってください。

人は誰でもこうなりたい、こうしたいという願いを持って、それがかなうように期待した努力したりするものです。大人も同じです。しかし、それが期待通りに行かなかったり、かなわなかったりすると、失望し、意欲を失わせてしまうものです。でも、それが本当は当たり前なんです。それが生きているということなんです。そのような中でもその状況を自分で受け止め、そこで常に全力を出して立ち向かっていくことが本当の生き方だと思えます。みなさんの周りには、幸いにもみなさんのことを理解しようと努力してくれるリーダー、指導員、先生方がたくさんいます。信じてあきらめることなく、がんばっていきましょう。